

【112】

氏 名	李 軫 鎬 り ちん こう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 5 7 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 37 年 12 月 18 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	雄 性 々 腺 機 能 が Arthus 現 象 に 及 ぼ す 影 響 に 関 す る 実 験 的 研 究

論文調査委員 (主 査)
教 授 鈴 江 懷 教 授 岡 本 耕 造 教 授 田 部 井 和

論 文 内 容 の 要 旨

1906年 V. Pirquet がアレルギー学説を発表して以来、この方面の研究は大いなる進歩を示し、いちじるしくその幅と深さを増し、今日においては実に広範な医学の分野における研究課題として盛んに研究が行なわれ、主要なる国々においてはその専門の学会が開催せられ、また適時国際アレルギー学会ももたれている。韓国におけるこの方面の研究は著者の恩師尹教授を始めとし、その門下の多数の研究者によって、開拓せられ、今日まで永年にわたる業績が数多く積み重ねられている。ことに諸種内分泌機能が各種臓器におけるアレルギー性変化に及ぼす影響に関する実験的研究は数多く行なわれて多彩な報告がなされている。例えば上皮小体剔出と過敏症との関係、副腎皮質製剤 Interenin と過敏症ショックとの関係、その他胸腺、脳下垂体、睪丸等についても研究せられ、また卵巢、脾臓、甲状腺などほとんどあらゆる内分泌について多くの研究がある。ところがこれら多数の一連の研究において、時にアレルギー性変化を促進し、時にそれを抑制するというような全く相反する成績を見出す場合があるのである。このような相違は元より動物の種類、研究方法の相違など、いろいろの条件がからみ合っておこるところのものであろう。本論文において著者が問題として取り上げた雄性性腺については、とくに尹教授門下の業績中、全く正反対の成績を示しているものが見出される。そこで著者はこの問題を根本的に解決しようとして、まずアレルギー現象の標徴として Arthus 現象を選び、これと雄性性腺との関係を検討したのである。その結果はなほだ興味ある成績をあげることができたのである。その概要はおよそ次のごとくである。

実験に使用した動物は雄性家兎であるが、その睪丸を剔出し、あるいは睪丸ホルモンを注射し、これらにそれぞれ馬血清感作を施し、その腹壁皮膚に惹起注射を施し、Arthus 現象を発生せしめ、それを正常対照家兎の成績と比較したのである。その結果、いずれの群においても成書に記載されているような病像を認め得たのであるが、ただ、その強弱の度合と、発来の遅速に相当明確な差異が見出されたのである。すなわち睪丸ホルモン注射群は病変の発来が強く速く重く速やかに経過するのに対し、睪丸剔出群は病変の発来が弱く遅く、比較的軽く長い経過を示すのであった。

そこで著者はこのような現象に対し、これが如何なる生物学的意義を持つものであるかということにつき考察したのであるが、およそ次のような結論に達したのである。すなわち睾丸剔出家兎において Arthus 現象が遅延減弱せしめられたということは、いかにも生体に対して、都合のよろしいような変化と考えられ、これに反して睾丸ホルモン注射家兎において、それが促進増強される傾向が著明であったことは、如何にも生体に対して不都合な現象のように考えられなくもないのである。ところが静かに考察をめぐらして見ると、それは全く反対の意味を持つものであることが判る。すなわち Arthus 現象が遅延減弱せしめられるということは、生体の防禦作用が衰えていることを示すもので生体にはかえって不都合なのである。これに反し Arthus 現象が促進増強されるということは表面的には如何にも生体を障害するもののごとくであるが、これは決してそうではなく、古く Rössle が述べたように局所の犠牲において生体を防禦する生物学的反応と見なさるべきものである。このように解釈することによって、雄性性腺機能がアレルギー反応に及ぼす生物的影響もきわめて合理的に解釈できるわけである。

論文審査の結果の要旨

生体において観察されるアレルギー反応は種々さまざまなアレルゲンによって惹起されるが、その質的、量的また時間的關係については、これまた多種多様であって、その間の確固たる条件を規定することはなかなか困難である。さらにこの場合生体の側における規定条件の一つとして内分泌機能異常を考慮の中に入れると、その間の事情がますます複雑多岐となってくる。事実著者の学んだ教室の指導者である尹教授の下で多数の内分泌機能とアレルギー反応に関する研究が行なわれているが、その成績は常に必ずしも一致したものではない。たとえば著者が今回の研究の題目としてとりあげた雄性性腺機能異常とアレルギー反応との関係についても全く相反した考案が試みられている。このような成績の不一致の根源を探ろうと考えて著者は掲題のような研究を行なったのである。

すなわち健康雄性白色家兎に性腺機能異常を惹起せしめ、馬血清感作の後、その腹壁への効果注射により発来する Arthus 現象を観察したのである。その結果雄性性腺機能亢進は Arthus 現象を促進増強し経過を迅速ならしめ、その機能低下脱失はこれを抑制減弱遷延せしめるということを確認したのである。ところが生体の生活現象に対して好都合であるべき性腺機能亢進時に Arthus 現象が強烈となり、生体生活力の減衰とも見なされるべき性腺機能低下時にかえってそれが抑制されるというのは一見いかにも不可解と考えられ、従来いろいろと混乱を生ぜしめたと思われる。ところが慎重に考察を廻らした結果、著者は Arthus 現象の強烈となることは、とりもなおさず局所の犠牲において全身を護るという炎症本来の目的に合致する生命現象であり、性腺機能亢進時にこれあるは当然の事柄であり、またその反対の場合も考えられるという結論に達したのである。

これは Arthus 現象なる複雑な古典的命題を本来の統一された素朴な思想の下に解釈しようとする当を得た帰結と言うべく、はなはだ興味が深い見解と思われる。したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。